

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 28 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
 TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp

「つながりつづける」

九州教区では3年に一度教区女性の会総会（九州教区では「婦人会」と呼ばずに「女性の会」と呼んでいますので「女性の会」と記します）が開催され、次期役員を担当するブロックを決めることになっています。今年6月にその総会が開催されました。しかし、来年教区女性の会を退会することを決めた教会があったこと、またブロック編成についても見直しが必要との意見が出るなどして、次期役員を決めることができませんでした。女性たちが教会の他の奉仕もして忙しいこと、高齢化していること、会員数の減少などがその理由です。



九州教区主教
ルカ 武藤 謙一

現在役員会は各教会にアンケートをとり、これからの教区女性の会の在り方について検討し、来年開催予定の各教会代表者会で協議することになっています。長年親しんできた教区女性の会ですが、活動の在り方、組織の在り方などが問われ、大きな転換点に来ていると強く感じました。会員の高齢化や会員数の減少によって女性の会活動がこれまでと同じようにできにくくなっているのは九州教区だけではないように思います。さまざまな理由でもう女性の会の活動を中止しようと考えている教会も少なからずあるのではないのでしょうか。しかし、わたしはどんなに人数が少なくても、またこれまでしてきた奉仕ができなくなったとしても女性の会を存続してほしいと願っています。例えば例会が毎月開催されなくても、集まれるときに一緒に祈り、聖書のみ言葉と一緒に耳を傾ける短い時間を持つだけでもいいと思うのです。そのようにして教区の女性の会に連なり、さらに日本聖公会婦人会のメンバーであるからこそ、感謝箱献金の働きに連なることができ、国内だけでなく広く海外の女性たちともつながることができるのです。2年前に熊本、大分を中心に大きな地震が起こりました。皆さんのお祈りとご協力に支えられて九州教区は九州地震被災者支援室を設けて被災者支援活動を行っています。この支援室の活動を支える聖書のみ言葉は「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」(ローマの信徒への手紙8章35節)と、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」(同12章15節)です。これらの聖書のみ言葉は「被災者を誰も孤立させないために」という支援活動のキーワードの基礎となるものですが、最近、わたしが強く感じることは、これらのみ言葉は被災者支援だけではなく、わたしたちキリスト者の日々の生活、他者との関わりを励ますみ言葉であるということです。それぞれに困難な状況や課題があると思いますが、全国の聖公会の女性たちの交わり、ことに感謝箱献金を通して与えられている豊かな交わりが、さらに深められ、広げられますよう、聖霊の導きをお祈りいたします。

行ってきました

九州教区女性の会 総会に参加

6月8～9日、北九州市小倉のアルモニーサンクにおいて第35回定期総会が開かれ、感謝箱献金事務局として、その簡単な歴史と活動、2016年度のお献げ先についてのお知らせのため、3名で参加しました。

役員6名に代議員9名、教役者は武藤教区主教はじめ11名、傍聴者は36名と65名の出席でした。定期総会には時間の都合で間に合わず(要請も受けていなかった)、8日の夕方会場に到着し、夕食からの参加でした。夕食後、熊本聖三一教会信徒でリデルライトホーム理事長の小笠原嘉祐氏の講演「老いを生きる」を拝聴しました。経験豊かなお働きをユーモアたっぷりに身近なテーマとして聴くことが出来ました。その後、熊本地震の支援についての報告を担当された方より受けた後、コアの報告をさせていただきました。講演や報告の後で、皆さんお疲れだったと思いますが、パワーポイントを用いての説明を熱心に聞いていただき、また、持参した「リグリマ・ジャパン」と「サイディアフラハ」の作品販売にもご協力下さいました。遠くて来られないと思っていた九州の地で、懐かしい方たち、初めてお会いする思いを同じくする信徒の方たちとの良い交わりの時を持つことが出来、大きな感謝でした。

9日の「わかちあい」の時間は代議員を中心に今後、女性の会を継続するために各教会の状況などを話し合われました。どの教区においても危機感を持っているのが、教区婦人会(九州では女性の会)を脱会する教会が多くなり維持するのが困難なことです。九州でも女性の会を継続するためにスリム化、ブロック制の改正など検討されましたが、現在の4ブロックを3ブロックにと提案された案は否決され、規約の改正も含め、各教会に持ち帰り、臨時総会も視野に入れての継続審議となりました。

閉会礼拝は武藤謙一教区主教の司式・説教で行われ、信施金は熊本の聖三一教会に献げられました。

120年以上、教会を支える女性たちが、組織を作り、力を合わせて継続してきた日本聖公会婦人会(日聖婦)、各教区婦人会、感謝箱献金の働きを何とか続けていきたいと努力する方たちが存在する今、神さまからのお力と教役者のご指導、信徒の皆さんのご協力で無くなることのないよう、祈る気持ちです。(感謝箱献金事務局 前運営委員長 古谷美子)



2017 難キ連チャリティコンサート

～すべての難民と移住労働者のために音楽と祈りの午後～

7月15日(土)午後、お茶の水クリスチャンセンターにおいて表記の会合が開催されました。参加者が意外に少なく(約30名)残念に思いましたが、コンサートに入る前、来日してから難民申請をしても認められず、仮放免の形で、滞在しているインド人シーク教徒母子(父親は収容)が証言されました。

就労が認められず病気になっても国民健康保険にも加入できないため100%の医療費支払いのため生活の困難な状況など、それでも難キ連の働きに支えられて日々を送っているお話でした。自国の厳しい状況から逃れて来日される外国の方が増える中で私達に何が出来るのかを改めて考える時間でした。

その後、元東京交響楽団のチェリストであり、玉川大学講師のボーマン・ベアンテ氏と夫人のボーマン・ルリ子さんによるチェロソナタ等の演奏で会場は美しい音色に包まれ、心温まるひと時を持ちました。難キ連の活動を支援するための署名をし、献金を献げましたが、これからも日聖婦・教区婦人会としてもこの活動を後ろから応援することを忘れないよう続ける大切さを感じました。(報告 古谷美子)



グローバルフェスタ JAPAN 2017

お台場センタープロムナード 9月30日(土)10月1日(日)

私たちコア新スタッフの3人は、9月30日(土)にグローバルフェスタに行ってみました。りんかい線もお台場も初めてでドキドキでしたが、フェスタに参加しているテントの数は予想以上に多く活気にあふれ、圧倒されながらサイディア・フラハのテントにたどり着きました。

代表の荒川勝巳さんや、サイディア・フラハを支える会の大門千春さんに初めてお目にかかることができました。ブースの中にはサイディア・フラハで扱っている手工芸品などが所狭しと並んでいます。ケニアの方々が心を込めてひとつひとつ丁寧に作っている様子が目に浮かびました。子どもたちもお手伝いして簡単な作業に参加しているとご説明を受けました。

いつも目にするサバンナの動物の葉や、眼鏡につけるアクセサリ、鮮やかな織物を使った布小物などに加えて、初めて目にする水筒ポーチやお弁当袋、さらには素敵なシャツなどもあり、「協力」の名のもとに思わず財布のひもがゆるくなったスタッフたちでありました。これからたくさんの人に出会い、サイディア・フラハやその他のお献げ先の活動をお伝えして行きたいと思っています。 ☺ Wassy



サイディアフラハのブースの前で荒川勝巳氏と

面会支援ボランティア (横浜教区社会委員会主催)

東日本入国管理センター 牛久 10月5日(木)

参加者 16名 レクチャーのみ参加者 2名 (柏聖アンデレ教会)

難キ連事務局局長佐藤直子さんにレクチャーを受け、6グループに分かれ收容されている11名の方にお会いしました。面会の大きな目的は、彼らの健康状態、必要としている物(日用品等)を聞く事。病気にかかっている場合、仮放免になった時にそのままだと医療費が本人の全額負担になってしまう。收容所にいる間に治しておかないと大変な事になってしまいます。

私がお会いした2人の青年は日本語が堪能でしたがガラス越しで声が曇って聞き取りにくい。それぞれが、「外はどうですか」と聞いてきた。冷暖房が完備されているのは良かったが外の風景を見る事が無いらしく季節感が無い彼らは、Tシャツにハーフパンツ姿。

21歳の彼はサッカーや筋トレで体が鈍らないようにしているが、他に何もすることがなくストレスで胃炎になって胃薬と睡眠薬をもらっているらしい。29歳の彼は頭も体も痛く、スポーツは出来ず痛み止めをもらっていると言う。具合が悪いとはいえ二人とも立派な体格で、自由であれば良いパパ、働き手でいられるだろうと思うと残念でならない。

ほしいものは?と聞くと「仮放免が欲しい」今回の差し入れはレトルトカレー・スティックコーヒー・ボディークリーム・タオル・ボールペン等でした。

「どうか彼らに仮放免が与えられますように。そしてその後の生活が希望に満ちたものになりますように」 ☺ Nao



シリア難民支援に対する「聖地ろうあ子どもの里」の取り組み

東京教区 聖オルバン教会 吉松英美

6年目に入ったシリア内戦

2011年にシリアで内戦が発生してから6年が経過した。しかしいまだに収束の目処は見えない。翌2012年には大量の難民が国外へ逃れ出した。国連の難民高等弁務官事務所（UNHCR）が2017年3月末に発表した数字では、これまでにおよそ500万人が国外に逃れ、そのうち65万人が隣国ヨルダンへ入ったという。今も入国を待つ難民が国境の検問所周辺に何万人という。しかし、入国審査は厳しく、入国は1日あたり50人から100人程度といわれる。

ヨルダン政府は2012年には国境から30キロのところにザータリ（Za'tari）キャンプを設置し、さらに2014年には少し離れたところにアズラック（Azraq）キャンプを設けた。二つのキャンプに收容されている人数は正確には把握されておらず、一説によると10万人とも20万人あるいはそれ以上ともいわれる。ザータリ・キャンプはシャンゼリゼ通りといわれる大通りがキャンプの真ん中にある、買い物客でごった返している様子がテレビでも度々放送された。

一方キャンプに收容しきれない人たちが国のあちらこちらに溢れている。2016年の春に筆者がヨルダンを訪れた時にも、ヨルダン川沿いに国連のマークの入ったテントが多数見られた。



「聖地ろうあ子どもの里」の取り組み

「聖地ろうあ子どもの里」（以下 HLID）では、いち早くシリア難民の救援に乗り出した。HLID は、2012年からザータリ・キャンプで障害のあるシリア難民の救済とリハビリ支援に参加した。しかし、対象となる人数が桁外れに多いため、他の組織・団体と協力し、それぞれが持っている専門性を活かしたサービスを提供してきた。



ここでは障害者のリハビリや訓練、知的障害を持つ子どもたち向けの特別教育プログラムなど聴覚や視覚障害、認知障害、身体的な障害対応の他に地域の病院での健康診断サービスも行っている。

2012年の12月には、ザータリ・キャンプにおける各施設間のネットワークが結成され、専門家によるチームが発足した。様々な障害に技術的な面からの支援を行っている。専門家チームは

ネットワークを通じて配置される。たとえば、AI-Diaa 協会からは視覚障害者支援、認知障害や特別教育には Raja 協会など専門に応じて引き受ける。HLID は、支援の作業効率を上げるためシリア難民の中からボランティアを募ってフルタイムまたはパートタイマーとして働いてもらっている。もとより手当を支払ってのことである。ザータリ・キャンプでの2012年11月から2016年



12月までの支援活動の実績は、リハビリが5,000人、特別教育が500人、保護者対象の補助器具の使い方指導が1,500人（いずれも概数）である。2017年からはアズラック・キャンプでも支援活動を開始した。専従の担当者を配置してトレーラハウスの購入や地域のボランティアの選考と訓練コースを実施してきた。遊び場には「聖地ろうあ子どもの里」の職業訓練生たちが作った鉄製の回転式の遊具を寄贈し、喜ばれているという。ここでの成果が出てくるのはこれからである。



「聖地ろうあ子どもの里」の施設長ブラザーアンドリューに吉松氏夫妻が感謝箱献金をお渡し下さいました。ブラザーアンドリューから「皆さまに、くれぐれもよろしくお伝え下さい」との謝意がありました。

8月28日エルサレム教区主教座聖堂で



2017年度 感謝箱献金 お献げ先・支援額

✧ 聖地ろうあ子どもの里（エルサレム教区） 40万円

ヨルダンの聴覚障がい・重複障がいの子どもの学校。約120名が寄宿生活のもと手話、自立のために学んでいる。その活動の一部支援としてお献げした。

✧ リグリマ・ジャパン 25万円

バングラデシュの少数民族ガロの女性たちの地位向上、経済的自立、差別の撤廃、尊厳の回復、弱者が安心して暮らせる社会を目指し、特に経済的自立に向けての支援としてお献げした。

✧ ニームの会 10万円

南インドのダリット(元アウトカースト)村の貧困女性を含め、カーストを超えた女性の仲間意識が生まれ、自立支援のため自然農法を取り入れた。その訓練、農機具、種子等の購入資金の一部支援として。

✧ 難キ連（難民・移住労働者問題キリスト教連絡会）15万円

非正規滞在(仮放免)の難民申請者のため正規滞在を求め、生活支援を行っている。日本語教室を開き日本語検定取得の支援、入国管理センター等の被收容者に面会支援、差し入れなど活動の一部支援として。

✧ 国際子ども学校 20万円

日本で暮らすフィリピン人の子ども達の学校。地域の学校へ子ども達を送り出す準備、母国語の授業、フィリピン人同士の交流会をもち、日本での養育に言葉や経済的不安を抱える家族を支えるため。

✧ サイディア・フラハ 20万円

ケニアの児童養護施設。7歳～18歳の女子児童17名を保護、養育している。孤児以外にも貧困地域の児童への学習指導、若い女性への裁縫訓練による自立・自活の手助け、施設に暮らす子ども達のため。

[次頁へつづく](#)

◇ 東日本大震災支援(積立) 今年度積立金額 20 万円

被災された多くの方々が今もなお、帰宅かなわず放射能被害のもとで暮らさざるを得ない状況にある。心を寄せ今後もつながっていくために用いるよう、2018 年度まで毎年 20 万円を積み立てる。

・釜石支援センター望 支援額 10 万円

釜石で仮設、復興住宅を中心にイベントの開催、戸別訪問を通して一部支援としてお献げした。

◇ 災害被災者支援(積立) 今年度積立金額 30 万円

国内外を問わず、災害時に即対応するための備えとして、前年度に集まった感謝箱献金総額から 2018 年度まで毎年 30 万円を積み立てる。

感謝箱献金と共に歩む

北関東教区婦人会会長 ヘレン 板橋 和子

北関東教区婦人会の創設を顧みますと、一八九七年(明治三十年)に北東京地方部(現在の北関東教区と東京教区の一部)婦人補助会が組織されましたが、その前に北東京地方部婦人大会が開催され、その献金の一〇分の一を米国 W A (ウーマンズオグジリアリ) に一致献金としてささげ、同時に台湾伝道開始に際して献金しているの、感謝箱献金の活動と共に歩み始めたといっても過言ではないでしょう。

茨城、栃木、群馬、埼玉四県に二十四教会と四礼拝堂、一講義所があり、現在は十五教会に婦人会と五教会に個人会員がいます。活動は戦時中一時休止されましたが、一九四六年(昭和二十一年)に再開されてから年一回総会を開催し、後半から二月二日被献日を総会日と決め、今年六十九回総会を開催しました。今年のトピックは、総会后、感謝箱献金事務局担当者から感謝箱献金の活動について、映像を見ながら説明があつたことです。世界中でこの献金が有効に使われ、多くの支えを必要とするところに活かされていることが理解でき、感謝箱献金協力の意欲が増しました。これは二〇一六年六月、日本聖公会婦人会総会で、北関東教区が日聖婦会長選出教区となり、役員をお引き受けした賜物と感しています。

感謝箱献金は、五〇%以上を日本聖公会婦人会にささげ、五〇%弱が北関東教区婦人会が奉献する箇所、聖公会神学院、ウイリアムス神学院、アジア学院、小名浜聖テモテ支援センター、滝乃川学園、難キ連にささげられます。その他にも胸を張って誇れる活動があります。文書部の働きとしている婦人会機関誌「いずみ」が二〇一六年に一〇〇号を迎えました。そこからはこれまでの婦人会の歩みが読み取れ、先人に学び、未来を考えながら今できることをできる範囲で行い、婦人会を継続してこうの思ひも感じ取れます。

四月二十九日前後に教区主催「信徒一致合同礼拝」が開催され、一九六七年から礼拝後に婦人会が中心となりバザーを開催しております。その収益は教役者の働きのため、感謝箱献金補助、社会福祉施設支援のためにささげています。その他霊的静想や祭壇奉仕など、研鑽を積む静想日も実施しています。

今の課題は、感謝箱献金を老若男女教区全員でささげられるように文書や各教会で説明し、教区の様々な集会の折、言葉でアピールを試みようとするこ、まず手始めに九月一七日・一八日に開催された「信徒・教役者の集い」で第一声を発したところです。



感謝箱献金事務局 新旧チャプレンから

主に感謝

司祭 ヤコブ三原一男

私が、横浜聖アンデレ教会に赴任したのが、2010年4月でした。そこからあれよあれよと言ううちに、横浜教区婦人会チャプレンから始まって、日聖婦チャプレン、感謝箱献金事務局チャプレンと、お役をいただきました。何と言っても、その間に、東日本大震災が起こり、婦人会を通しての働きに関わらせていただきましたのは、得難い経験であり大変感謝しております。何度も、ワゴン車で現地を訪れ、被災者の方々や支援者の方々とのお会いを通して多くのことを学ばせていただきました。特に、南相馬の六角支援隊の大留隆雄さんは、全国の婦人会を通しての支援について、本当に心から感謝しておられます。教会がおよそ、通常の牧会、宣教の枠を超えて、このような支援活動ができたことは、婦人会の力だと思います。リグリマ・ジャパンがバングラデシュ、ニームの会が南インド、アルディナ・ウペポとサイディア・プラハがケニア、というような外国への支援については、私は名前さえなかなか覚えられずにいましたが、スタッフたちはたくましく、国の内外を問わず、女性や子どもたちへの自立を目指した必要な支援活動を進めてくださいました。これからもこの活動の上に神様の祝福と導きをお祈りいたします。

(前感謝箱献金事務局チャプレン)

ありがとうございました。



司祭 エレミヤ・パウロ木村直樹

この度、チャプレンに就任しました。そこで、あらためて感謝箱献金Q&Aを読み、最初の言葉に出会って、襟を正されました。そこには「日々の感謝の献金です。募金ではありません」とあります。日々の営みの中に神さまの恵みを見出し、そのことに感謝し、献金するのが、感謝箱献金だということです。わたしたちの毎日は、慌しく、そして忙しく過ぎていきます。これらの字を見ると、りっしんべんに「荒」「亡」となっています。心が荒れ、心を亡くしてしまうということです。そうになると、感謝することも、祈ることもできなくなり、遂には、心身ともに疲れ果ててしまいます。でもこんな疲れ果てたわたしたちに、イエスさまの言葉が聞こえてきます。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ11:28)。感謝の気持ちとは、このイエスさまの言葉に励まされ、神さまに祈るときに、与えられるものだと思います。

よろしくお願ひします。



新しい仲間たちも加わって木村チャプレンと

感謝箱献金のいのり

神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。
イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。
私たちにもそのイエスさまの歩みに倣（なら）う心をお与えください。
私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。
また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。

主イエス・キリストのみ名によって アーメン

今夏、聖公会神学院の実習として、3週間、榛名の新生会に参りました。日聖婦でも活躍されていた横浜教区の懐かしい方々との再会、また、新たな方々との出会いもありましたが、ある方のお宅にお邪魔したところ、お部屋の目立つ場所に感謝箱が置かれていることに気が付きました。その時、感謝箱献金の重みをあらためて感じたのでした。と申しますのも、感謝箱献金の存在自体は、その箱が緑色だった頃より存じていましたが、強く意識するようになったのは、中部教区職員として、私自身がたずさわっておりました国際子ども学校のために、感謝箱献金から支援を受ける側となったからでした。



国際子ども学校は、諸事情で学校に行くことの困難なフィリピン人の子どもたちのために1998年に設立したもので、既存の制度からはじき出されてしまった子どもたちゆえに、公的補助を受けることが困難で、教会内外から様々な形で支援を受けながら運営されています。そうした中で、感謝箱献金より長期間に渡って支援を受けることができたことは有り難いことでした。また、2007年には感謝箱献金事務局(コア)が京都教区センターに開設されて、おそらく真先に長年の支援先であった国際子ども学校を訪問してくださり、本誌『ガリラヤのほitori』の第1号でご紹介いただきました。また、コアが横浜聖アンデレ教会に移転した折にも、すぐに訪問していただき、本誌等を通じて全国の教会にあらためて活動をご紹介くださり、感謝箱献金の活動を身近なものと思ってきました。

しかし、感謝箱献金の活動の核心とは、何よりも一人ひとりの感謝と祈りの業であり、上記のような働きも、無数の方々の日々の業に支えられてきたことを、榛名の一室に置かれていた感謝箱を見た時に再認識させられたのでした。今後も感謝の祈りの輪の中にあって、共に歩んで参りたいと願っております。

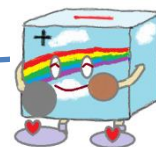


プロフィール

出身：山梨県生まれ。神奈川県・千葉県育ち。

経歴：1997年より2017年3月まで日本聖公会中部教区職員として主に社会宣教事業に従事。2017年4月、聖公会神学院に入学。

趣味：学生時代のバンド仲間のライブを見に行く。旅行。



コア新メンバーより・・・

😊 市川聖マリヤ教会の日暮直子です。

すみません！呼ばれるがままに来てしまいましたが、難しい事は何もわかりません！今まで目の前の子どもたちを相手に小さな世界で過ごしてきました。せっかく与えられた機会、もう少し世界を広げられていければ良いなと、思っています。よろしくお願い致します。

😊 松戸聖パウロ教会の鷺沢和子です。

感謝箱はいつもなにげなく家の中にありましたが、その歴史や活動内容など知れば知るほど婦人会を中心とした女性のお働きのすばらしさを感じています。おひとりでも多くの方にお伝えしていけるようにお役に立てれば、と思っております。どうぞよろしくお願い致します

編集後記

今号より感謝箱献金事務局のスタッフが半数交代し、慣れない事も多く、無事に発行出来ました事に安堵しております。また、今回は日本聖公会管区事務所の多大なご協力とご支援により、カラーで印刷をすることができました。心より感謝申し上げます。

新チャプレンのもと5名のスタッフと共に、皆さまからのお祈りとお献げものを、支援を必要とされる方々にお届けし、お届け先の声を皆さまにお伝えする顔の見える関係を今後も大切にしてゆきたいと思ひます。宜しくお願い致します。 感謝箱献金事務局(コア)

新運営委員長 永井真由美